わが散文詩

芥川龍之介

秋夜

火鉢に炭を継(つ)がうとしたら、炭がもう二つしかなかつた。炭取の底には炭の粉(こな)の中に、何か木(こ)の葉が乾反(ひぞ)つてゐる。何処(どこ)の山から来た木の葉か？——今日(けふ)の夕刊に出てゐたのでは、木曾(きそ)のおん岳(たけ)の初雪も例年よりずつと早かつたらしい。

「お父さん、お休みなさい。」

古い朱塗(しゆぬり)の机の上には室生犀星(むろふさいせい)の詩集が一冊、仮綴(かりとじ)の頁(ペエジ)を開いてゐる。「われ筆とることを憂(う)しとなす」——これはこの詩人の歎きばかりではない。今夜もひ

とり茶を飲んでゐると、しみじみと心に沁みるものはやはり同じ寂しさである。

「貞（てい）や、もう表をしめておしまひなさい。」

この呉須（ごす）の吹きかけの湯のみは十年前（まへ）に買つたものである。「われ筆とることを憂しとなす」——さう云ふ歎きを知つたのは爾来（じらい）何年の後（のち）であらう。湯のみにはとうに罅（ひび）が入つてゐる。茶も亦（また）すつかり冷（ひ）えてしまつた。

「奥様、湯たんぽを御入れになりますか？」

すると何時（いつ）か火鉢の中から、薄い煙が立ち昇つてゐる。何かと思つて火箸（ひばし）にかけると、さつきの木の葉が

煙るのであつた。何処（どこ）の山から来た木の葉か？——この匂（にほひ）を嗅（か）いだだけでも、壁を塞（ふさ）いだ書棚の向うに星月夜の山山が見えるやうである。

「そちらにお火はございますか？　わたしもおさきへ休ませて頂ますが。」

椎（しひ）の木

椎（しひ）の木の姿は美しい。幹や枝はどんな線にも大きい底力を示してゐる。その上枝を鎧（よろ）つた葉も鋼鉄のやうに光つてゐる。この葉は露霜（つゆじも）も落すことは出来ない。

たまたま北風《きたかぜ》に煽《あふ》られれば一度に褐色の葉裏を見せる。さうして男らしい笑ひ声を挙げる。

しかし椎の木は野蛮《やばん》ではない。葉の色にも枝ぶりにも何処《どこ》か落着いた所がある。伝統と教養とに培《つちか》はれた士人にも恥ぢないつつましさがある。槲《かし》の木はこのつつましさを知らない。唯冬との※《せめ》［＃「門＜兒」、332-下-18］ぎ合ひに荒荒しい力を誇るだけである。同時に又椎の木は優柔でもない。小春日《こはるび》と戯《たはむ》れる樟《くす》の木のそよぎは椎の木の知らない気軽さであらう。椎の木はもつと憂鬱である。その代りもつと着実である。

椎《しひ》の木はこのつつましさの為に我我の親しみを呼ぶ

のであらう。又この憂鬱な影の為に我我の浮薄(ふはく)を戒めるのであらう。「まづたのむ椎の木もあり夏木立(こだち)」——芭蕉(ばせを)は二百余年前(ぜん)にも、椎の木の気質を知つてゐたのである。

椎の木の姿は美しい。殊に日の光の澄んだ空に葉照(はで)りの深い枝を張りながら、静かに聳えてゐる姿は荘厳に近い眺めである。雄雄(をを)しい日本の古天才も皆この椎の老い木(おき)のやうに、悠悠としかも厳粛にそそり立つてゐたのに違ひない。その太い幹や枝には風雨の痕(あと)を残した儘。……

なほ最後につけ加へたいのは、我我の祖先は杉の木

のやうに椎の木をも神と崇（あが）めたことである。

虫干

この水浅黄（みづあさぎ）の帷子（かたびら）はわたしの祖父（おほぢ）の着た物である。祖父はお城のお奥坊主（おくぼうず）であつた。わたしは祖父を覚えてゐない。しかしその命日毎（めいにちごと）に酒を供（そな）へる画像（ぐわざう）を見れば、黒羽二重（くろはぶたへ）の紋服（もんぷく）を着た、何処（どこ）か一徹（いつてつ）らしい老人である。祖父は俳諧を好んでゐたらしい。現に古い手控（てびか）への中にはこんな句も幾つか書きとめてある。

「脇差（わきざ）しも老には重き涼みかな」

（おや。何か映（うつ）ってゐる！　うつすり日のさした西窓（にしまど）の障子に。）

　その小紋（こもん）の女羽織（をんなばおり）はわたしの母が着た物である。母もとうに歿してしまつた。が、わたしは母と一しよに汽車に乗つた事を覚えてゐる。その時の羽織はこの小紋か、それともあの縞（しま）の御召（おめ）しか？　――兎（と）に角（かく）母は窓を後（うし）ろにきちりと膝を重ねた儘、小さい煙管（きせる）を啣（くは）へてゐた。時時わたしの顔を見ては、何も云はずにほほ笑（ゑ）みながら。

（何かと思へば竹の枝か、今年（ことし）生えた竹の枝か。）

　この白茶（しろちや）の博多（はかた）の帯は幼いわたしが締めた物である。

わたしは脾弱(ひよわ)い子供だつた。同時に又早熟な子供だつた。わたしの記憶には色の黒い童女の顔が浮んで来る。なぜその童女を恋ふやうになつたか？　現在のわたしの眼から見れば、寧(むし)ろ醜(みにく)いその童女を。さう云ふ疑問に答へられるものはこの一筋の帯だけであらう。わたしは唯樟脳(しやうなう)に似た思ひ出の匂(にほひ)を知るばかりである。（竹の枝は吹かれてゐる。娑婆界(しやばかい)の風に吹かれてゐる。）

線香

わたしは偶然垂(た)れ布(ぬの)を掲(かか)げた。……

妙に薄曇つた六月の或朝。

八大胡同(はちだいことう)の妓院(ぎゐん)の或部屋。

垂(た)れ布(ぬの)を掲げた部屋の中には大きい黒檀(こくたん)の円卓(テエブル)に、美しい支那(しな)の少女が一人(ひとり)、白衣(びやくえ)の両肘(りやうひぢ)をもたせてゐた。わたしは無躾(ぶしつけ)を恥ぢながら、もと通り垂れ布を下(おろ)さうとした。が、ふと妙に思つた事には、少女は黙然(もくねん)と坐つたなり、頭の位置さへも変へようとしない。いや、わたしの存在にも全然気のつかぬ容子(ようす)である。

わたしは少女に目を注(そそ)いだ。すると少女は意外にも幽(かす)かに瞼(まぶた)をとざしてゐる。年は十五か十六であらう。

顔はうつすり白粉（おしろい）を刷（は）いた、眉（まゆ）の長い瓜実顔（うりざねがほ）である。髪は水色の紐に結（むす）んだ、日本の少女と同じ下げ髪、着てゐる白衣（びやくえ）は流行を追つた、仏蘭西（フランス）の絹か何からしい。その又柔かな白衣の胸には金剛石（ダイアモンド）のブロオチが一つ、水水しい光を放つてゐる。

少女は明（めい）を失つたのであらうか？　いや、少女の鼻のさきには、小さい銅の蓮華（れんげ）の香炉（かうろ）に線香が一本煙つてゐる。その一本の線香の細さ、立ち昇る煙のたよたよしさ、——少女は勿論（もちろん）目を閉ぢたなり、線香の薫（かほ）りを嗅（か）いでゐるのである。

わたしは足音を盗みながら、円卓（テエブル）の前へ歩み寄つた。

少女はそれでも身ぢろぎをしない。大きい黒檀の円卓(テエブル)は丁度(ちやうど)澄み渡つた水のやうに、ひつそりと少女を映(うつ)してゐる。顔、白衣(びやくえ)、金剛石(ダイアモンド)のブロオチ——何一つ動いてゐるものはない。その中に唯線香だけは一点の火をともした先に、ちらちらと煙を動かしてゐる。

少女はこの一炷(いつしゆ)の香(かう)に清閑(せいかん)を愛してゐるのであらうか？　いや、更に気をつけて見ると、少女の顔に現れてゐるのはさう云ふ落着いた感情ではない。鼻翼(びよく)は絶えず震えてゐる。脣(くちびる)も時時ひき攣(つ)るらしい。その上ほのかに静脈(じやうみやく)の浮いた、華奢(きやしや)な顳顬(こめかみ)のあたりには薄い汗さへも光つてゐる。……

わたしは咄嗟に発見した。この顔に漲る感情の何かを！

妙に薄曇つた六月の或朝。

八大胡同の妓院の或部屋。

わたしはその後、幸か不幸か、この美しい少女の顔程、病的な性慾に悩まされた、いたいたしい顔に遇つたことはない。

日本の聖母

山田右衛門作は天草の海べに聖母受胎の油画を作つ

た。するとその夜聖母「まりや」は夢の階段を踏みながら、彼の枕もとへ下つて来た。
「右衛門作！　これは誰の姿ぢや？」
「まりや」は画の前に立ち止まると、不服さうに彼を振り返つた。
「あなた様のお姿でございます。」
「わたしの姿！　これがわたしに似てゐるであらうか、この顔の黄色い娘が？」
「それは似て居らぬ筈でございます。――」
右衛門作は叮嚀に話しつづけた。
「わたしはこの国の娘のやうに、あなた様のお姿を描

き上げました。しかもこれは御覧の通り、田植(たうゑ)の装束(しやうぞく)でございます。けれども円光(ゑんくわう)がございますから、世の常の女人(によにん)とは思はれますまい。

「後(うし)ろに見えるのは雨上(あまあが)りの水田(すゐでん)、水田の向うは松山でございます。どうか松山の空にかかつた、かすかな虹(にじ)も御覧下さい。その下には聖霊を現す為に、珠数懸(じゆずか)け鳩(はと)が一羽飛んで居ります。

「勿論かやうなお姿にしたのは御意(ぎよい)に入らぬことでございませう。しかしわたしは御承知の通り、日本の画師(ゑし)でございます。日本の画師はあなた様さへ、日本人にする外(ほか)はございますまい。何(なん)とさやうではござい

ませんか？」

「まりや」はやつと得心したやうに、天上の微笑を輝かせた。それから又星月夜の空へしづしづとひとり昇つて行つた。……

玄関

わたしは夜寒の裏通りに、あかあかと障子へ火の映つた、或家の玄関を知つてゐる。玄関を、――が、その蝦夷松の格子戸の中へは一遍も足を入れたことはない。まして障子に塞がれた向うは全然未知の世界であ

る。

しかしわたしは知つてゐる。その玄関の奥の芝居を。涙さへ催させる人生の喜劇を。

去年の夏、其処(そこ)にあつた老人の下駄(げた)は何処(どこ)へ行つたか？

あの古い女の下駄とあの小さい女の子の下駄と――あれは何時(いつ)も老人の下駄と履脱(くつぬ)ぎの石にあつたものである。

しかし去年の秋の末には、もうあの靴や薩摩(さつま)下駄が何処(どこ)からか其処(そこ)へはひつて来た。いや、履(は)き物ばかりではない。幾度もわたしを不快にした、あの一本の細

巻きの洋傘（かうもり）！　わたしは今でも覚えてゐる。あの小さい女の子の下駄には、それだけ又同情も深かつたことを。

最後にあの乳母車（うばぐるま）！　あれはつい四五日前（まへ）から、格子戸（かうしど）の中にあるやうになつた。見給へ、男女の履（は）き物の間におしやぶりも一つ落ちてゐるのを。

わたしは夜寒の裏通りに、あかあかと障子へ火の映（うつ）つた、或家の玄関を知つてゐる。丁度（ちやうど）まだ読まない本の目次（もくじ）だけざつと知つてゐるやうに。

（大正十一年十二月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。